

『邪馬台三國志』歴史物語編 上、中1、中2、下 目次

◇倭国／倭奴国の国のかたち ◇邪馬台国はどこか ◇本書の王系譜

◇縄文期の東西文化 ◇水田稲作の伝播 ◇中国神話と古代史／策封のかたち ◇インド古代史

倭国の生い立ち ◇封禪・郊祭と蓬萊三島の仙人 ◇先祖祭祀と宗教

●那珂つ国 ◇海神と不老長寿の仙薬・蓬萊郷づくり ●天之国とオロチ敵之国王朝 ●倭国王朝の建国

倭奴国王朝 ●豊葦原中つ国と伊都国の王朝 ◇漢の西域支配／クシヤン朝・パルティア国の歴史

●倭奴国王朝／安曇族の渡来 ◇海神族、呉太伯ら子孫、越オロチ族、安曇族の伝統と風習

倭国大乱と邪馬台国 ◇南伝仏教の東アジア流入 ●神国と常世づくりと伊奘諾 ◇熊族／熊曾（熊襲）の遠祖

◇熊野権現 ◇牛頭天王と磐座／大穴持と素戔鳴 ◇白髭神社と謡曲白髭／蓬萊郷と仏法・山王信仰の聖地

●豊受皇太神 ●倭国大乱 ●伊奘諾の南遷 ●二人の天照大（御）神 ◇太陽（日）神と牛頭天王の源流

東西の王朝 ●日神の出現 ●天石窟 ●オロチ退治 ●天日槍襲来

●天照大神、高千穂宮へ／天孫饒速日の天降り ●葦原中つ国平定 ●天孫瓊瓊杵の出現

●皇孫火瓊瓊杵の天降りと日隈 ●日神の畿内遷座 ●天照大神の湖西高島宮と天成神道

倭の女王 ●倭の女王ヒミコと纏向上之宮／皇孫火瓊瓊杵の日前国西都と天孫天火明の日高見国東都

●皇子の交換 ●女王の朝貢 ●海幸彦と山幸彦

●内部抗争 ●火明饒速日（海幸彦）の天降り ●女王の伊勢遷座

日本王朝と日前の対立 ●女王トヨ ●一都七道制 ●天神火明饒速日 ●太子 磐余彦 ●景行の熊襲征伐

●和王 磐余彦（山幸彦の孫） ●仲哀の熊襲征伐

天下は一つ、家は一つ（神武東征） ●東征出発 ●筑紫国の奪還 ●新羅遠征 ●吉備征伐／高島宮／出雲征伐

●生駒の敗北 ●熊野上陸／熊野権現の神倉山垂迹 ●日前宮の創祀／日本に迫る ●日本の降伏

大和朝廷の成立 ●橿原宮 ●日本武尊の北伐 ●大和朝廷のはじまり 1／2 ●皇祖天神に奉る郊祭

◇天璽の鏡と神璽の鏡三面 ◇十握剣の変転／石上神宮と鹿島神宮の祭祀変遷 ◇邪馬台国の興亡史概略

◇家長と祭器／祭器の変遷 ◇大乱／素戔鳴の大蛇退治に関わる人物 ◇日隈・日前・熊野家統合と先祖祭祀復興

◇著墓古墳の変遷／歴代ヒミコの墓 ◇向津姫（日神）誕生後の歴史と年代 ◇主要人物の生きた推定年代

## ◇家長と祭器

◆縄文晩期の那珂つ国……死返玉・道返玉・生玉・足玉・葉細玉、足高・羽太・赤石の玉など玉八つに加えて、

熊の神籬・蜂の領巾など玉つ宝十種

◆前五世紀の天之国……日鏡、奥つ鏡・辺つ鏡など鏡三面

◆前四世紀の敵之國……死返玉など玉五つ(もと那珂つ国祭器)、奥つ鏡・辺つ鏡(もと天之国祭器)に加えて、

敵之國本家の宗像家 軍団を指揮する八握の細形銅劍(神璽)、船団を指揮する蛇の領巾など瑞宝十種

◆前四世紀の熊族(熊襲)……銅矛、日鏡(もと天之国祭器)、玉三つ(もと那珂つ国祭器)、熊の神籬など熊族神宝

◆前三世紀の倭国王朝(高天)……北方系銅鏡

日隈(熊野家)……玉飾りを結び付けた瓊矛、日鏡・玉三つ、熊の神籬・神杵など日隈(熊野家)神宝

◆豊葦原中つ国の天叢雲……天璽の天叢雲劍、死返玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、蛇の領巾など瑞宝十種

中興の祖天香来土……黄金の弓矢

◆敵之國宗家の宗像家……玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅劍(天叢雲劍)、蛇の領巾など瑞宝十種

◆伊都国王朝の天叢雲……天璽の天叢雲劍(有柄銅劍)、前漢鏡の内行花文鏡、巨大な国産内行花文鏡

◆倭奴国王朝初代女系天神の天常立……光武帝から賜る天璽の方格規矩鏡 鐘溝遺跡(糸島市)が彼女の墓？

国常立(天常立の婿)……神璽の金印「漢委奴国王」

日隈(熊野家)……玉飾りを結び付けた瓊矛、日鏡・玉三つ・熊の神籬など日隈神宝で天神を守護

日高の高皇産靈……天神から布都斯魂の十握劍を託され、倭奴国王朝を守護

六代天神天之尾羽張……天璽の方格規矩鏡 平原墳丘墓(糸島市)が彼女の墓？

◆大倭家と太氏一門……銅鐸 面足神と大山祇神：弓矢 三輪氏：鉄刀

◆日隈(熊野家)の伊奘諾……神璽の金印「漢委奴国王」、神璽の瓊矛・日鏡・熊の神籬など日隈神宝、

布都斯魂劍で倭奴国王朝と天神を守護

◆邪馬台国の水天神天照大神……新たに鑄た天璽の天叢雲劍(中細銅劍)

火天神天鹿兎山(天羽羽)……天璽の天鹿兎弓・羽羽矢

◆宗像家宗女の田心姫……玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅劍(天叢雲劍)・蛇の領巾など瑞宝十種

◆日神の天照大御神……石窟戸前で鑄た天璽の伊勢大神(三角縁神獸鏡) 倭女王ヒミコ……伊勢大神、魏帝鏡

- ◇素戔鳴……………(方格規矩鏡)、神璽の金印「親魏倭王」、豪族に配る鏡(祭祀用八咫鏡と魏帝鏡)
- ◇高千穗宮の**高皇產靈**……………日矛・日鏡など熊野家神宝、日前鏡、布都斯魂の十握劍で大蛇(天照大神親子)退治(高千穗宮に赴く**天照大神**)  
布都御魂劍に、「刃に血塗らずして倭国統一(高天十邪馬台国)」を誓う
- ◇先代旧事本紀の饒速日……………天神の御子と印す神璽の天鹿兒弓・羽羽矢、  
玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅劍(天叢雲劍)、蛇の領巾など瑞宝十種
- ◇**日前**の皇孫火瓊瓊杵……………天神の御子と印す羽羽矢、石窟戸前で鑄た八咫鏡(日前鏡)・天叢雲劍など三種宝物、  
石窟戸前で鑄た日矛(熊野櫛御氣野神像)・日鏡など日隈(日前)神宝
- ◇**日高見**国の天孫天火明……………後日、天叢雲劍、日矛・日鏡など日隈(日前)神宝を返上  
笠縫邑で鑄た天照大神之御魂(天璽の鏡の形代、天火明命)及び天叢雲劍形代の八握劍、  
天神の御子と印す天鹿兒弓・羽羽矢
- ◇天日槍(五十猛)……………日矛・日鏡・玉三つなど熊野家神宝、奥つ鏡・辺つ鏡など瑞宝五種
- ◇**日本朝**の**火明饒速日**……………神璽の十握劍二振り(布都斯魂劍と布都御魂劍)、天神の御子と印す**天璽**の羽羽矢、  
天神**天照国照彦火明**……………鏡作郷で鑄た神璽の天照御魂神(天璽の鏡の形代、天照国照彦火明命) **天璽**の瑞宝  
布都斯魂・布都御魂の十握劍二振りに、倭国統合(日本朝による和国併合)を誓う
- 三輪大物主大神、火雷の御歳神・大山咋(共に素戔鳴孫)・賀茂龍神(閻龍)、又は末裔：丹塗矢
- ◇**日前**の**火火出見**……………天神の御子と印す天鹿兒弓・羽羽矢、日前鏡
- ◇紀伊熊野家(五十猛)……………日矛、日鏡、玉三つ・熊の神籬など熊野家神宝
- ◇**和**の磐余彦……………天神の御子と印す羽羽矢、日前鏡など日前神宝、戦死者を弔う葬送用八咫鏡、  
仲哀から奪った布都斯魂劍・日矛(熊野権現御魂)、高倉司から献上された布都御魂劍、  
伊勢神宮の倭姫から賜る天照大神御霊の天叢雲劍↓駿河国焼津で高皇產靈御魂の草薙  
劍に改名↓陸奥で刃に血塗らずして日高見の蝦夷を帰服↓熱田神宮の熱田大神
- ◇**日本武尊**……………
- ◆**大和朝廷**の神武(磐余彦)……………笠縫邑で新たに鑄た神璽の八咫鏡と草薙劍(天璽の鏡劍の形代)
- ◆**火明饒速日子**孫の物部氏……………布都御魂劍を授かり、朝廷と磐余彦火火出見の宮殿守護を誓う。瑞宝を朝廷に奉獻

## ◇祭器の変遷

鉄剣十握劍

倭奴国王朝草創期

大乱

安河誓約

大蛇退治

仲哀の熊襲征伐

布都斯魂劍

天常立↓国常立↓天(敵)之尾羽張↓伊奘諾↓素戔嗚↓

黄泉国

高千穂

新羅・出雲

高千穂

大倭

大倭

(倭奴国王朝)

北九州

天(伊都)之尾羽張劍

高天守護の劍

天羽羽斬劍

日本朝守護の劍

熊襲征伐に従軍

神武東征

石上布都之魂神社に奉納

崇神期

↓(大神)武甕雷↓

磐余彦↓

吉備の神部↓

石上神宮

大倭・北九州

北九州(熊野)

吉備

大和

神功軍に寝返り

天照大神御魂

布都斯魂

鉄剣十握劍

葦原中つ国の平定

高皇産靈帰国・日神の畿内遷座

東征軍北上阻止を下命

布都御魂劍

日神↓高皇産靈↓武甕槌↓日神↓高皇産靈↓天照大神↓ヒミコ↓

高皇産靈帰国

天照大神↓ヒミコ↓

火明饒速日↓高倉下↓

(高千穂宮)

高千穂

出雲

高千穂

大倭

大倭

大倭

熊野

期に新造

高皇産靈神像 布都御魂

高皇産靈・天照大神御魂

日本朝守護の劍

高天守護の劍)

高倉下寝返り

熊野北上

磯城侵攻

日本打倒

饒速日帰順

神武即位・大和朝廷の成立

↓(大神)武甕雷↓

磐余彦↓

物部氏↓

石上神宮

那智・熊野

熊野

大倭

大和

大和

布都御魂

高皇産靈・天照大神御魂

中細銅劍

天璽

オロチ退治

天之国王朝

天孫降臨

天(敵)王朝

倭姫による祭祀

東国征伐

高皇産靈御魂

天叢雲劍

天照大神↓素戔嗚↓

日神↓

火瓊瓊杵↓

ヒミコ↓

伊勢神宮の倭姫↓

日本武↓宮ス姫↓

熱田神宮

(天照大神)

大倭(出雲)

出雲

高千穂

南九州

大倭(笠縫邑)

伊勢

東国

尾張

の天璽)

大倭(出雲)

高千穂

大倭(笠縫邑)

伊勢

草薙劍

尾張

銅鏡

日前鏡

(日前再興の印)

新羅出奔 天日槍來襲 国譲り 天孫降臨 神武東征 日前再興

日神↓素戔嗚↓天日槍↓大己貴↓日神↓火瓊瓊杵↓火火出見↓磐余彦↓日前神宮

高千穂 新羅 播磨 出雲 高千穂 南九州 南九州 日向/紀伊 紀伊

日の像の鏡 飯の日神御魂 日前鏡

新羅出奔

天日槍來襲

国譲り

天孫降臨

紀伊熊野家本家再興

日矛

日神↓素戔嗚

天日槍

大己貴

日神↓

火瓊瓊杵

火火出見

磐余彦

日前神宮

(日限神宝・熊野家神宝・

高千穂

新羅

播磨

出雲

高千穂

高千穂/南九州

大倭

紀伊名草、但馬出石

熊野家神宝・

日矛(熊野櫛御氣野神像)

神武東征

新羅征伐

日矛など日限神宝

熊野家神宝

日前神宝)

仲哀↓

磐余彦↓

神功↓

磐余彦↓

神功↓磐余彦↓国懸神社

紀伊/檀日

檀日

新羅

熊野

紀伊

紀伊名草

国懸大神(日矛鏡)

熊野家神宝

日前神宝

日前神宝

日前神宝

天鹿兎弓・羽羽矢

(天鹿兎山の天璽、

火天神の御子の印し)

日神↓饒速日

大倭降臨

高千穂

日向/大倭

葦原中つ国に派遣、復命せず

大和白庭山の墓に埋納

日神↓天稚彦

天孫降臨

和王朝

神武東征/日本打倒/大和朝廷樹立

日神↓火瓊瓊杵↓火火出見↓

磐余彦

メスリ山古墳に埋納?

高千穂

南九州

南九州

日向/大倭

互いに羽羽矢を見せ合い

天(巖)王朝

日本王朝

火天神の御子と悟る

日神↓天火明? ↓ヒミコ ↓火明饒速日

垂仁陵(宝来山古墳)に埋納?

日神↓日子坐王?

火雷(大山咋末裔か賀茂龍神(閻竈)末裔)?

## 『邪馬台三国志』歴史物語 上 梗概(あらすじ)

縄文中期、黄帝子孫が渡来して、地の神を祀る那珂つ国を那珂川流域に建国した。彼らは仁徳・慈愛の政を謳いながら、忠臣四力国を四方に配置して国の守りを固めた。北方に地の神を称える后土末裔の闇見国(黄泉国)、国東に杵築国、南国に炎帝子孫と語る火の国・その配下の熊族(熊襲)、西方に水神を祀る海神大神である。

当時の那珂つ国王は、玉つ宝八つ・熊の神籬など玉つ宝十種を奉じながら、神国三昧に明け暮れてきた。

前五世紀前半、呉太伯ら子孫が九州西北に渡来して水田稲作を広める一方、日鏡・奥つ鏡・辺つ鏡でいて日の神を称える天之国を建てた。双方は天地と銘打って奈良盆地、琵琶湖南に進出した。前四世紀後半、越王句踐につながる越オロチが襲来して那珂つ国を倒し、蛇神を崇めるオロチ厳之国王朝を建てた。

その後の越オロチは、海神大神と手を組み、瑞宝十種を奉る厳之国本家の宗像家を共立すると、越流米づくりに進出した。同時に、吉野ヶ里に一門重鎮を策封して筑紫平野に睨みを利かせた。

その瑞宝十種は、死返玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、軍団を統率する八握の細形銅劍、船団を指揮する蛇の領巾などで、玉五つは那珂つ国から奪った玉つ宝、鏡二面は天之国から強奪した神鏡だった。

熊襲も那珂つ国から熊の神籬を取り戻した上に、赤石の玉など玉三つを奪い、これに天之国からもぎ取った日鏡を付け足し、熊族神宝として奉ってきた。

前三世紀後半、戦国韓勢が渡来して唐津湾岸に日高国を建てた。天之国は太伯子孫の日高と盟約して唐津湾岸に倭国(高天、日高十天之国)王朝を建て、東海まで進攻したが、東の縄文勢や北陸のオロチ勢に阻まれた。

その後、熊襲も平らげると、天之国が筑紫国を治めた。日高は日の国（佐賀・長崎県）の統治に加えて、火の国だった熊襲も間接統治した。

そのまた後、王朝は日隈（熊野家）に玉飾り付き瓊矛を授けて、倭王警護、熊襲の統治・開拓を背負わせた。同時に、三家による支配体制に切り替えた。熊本平野に移った日隈王は、熊族神宝を揃って譲り受けると、これに瓊矛をつけ足し、日隈神宝として奉ってきた。

以後、豊葦原中つ国王朝、伊都国王朝王朝がたて続けに興った。

一世紀前半、天之国女帝の天常立は地の神を祀る豊葦原中つ国王厳香具土と連合して伊都国を吉野ヶ里に押し戻し、糸島平野に倭奴国王朝（天地）を開くと、井原に天宮して日天神に昇った。厳香具土は国常立と改名して彼女の婿に納まり、倭奴国王、伊都国王を兼ねて政を取り仕切った。

王朝樹立に大手柄を立てた重鎮、日高の高皇産霊は、布都斯魂の十握剣と共に王朝を警護する天（水）軍を賜った。

五七年正月、倭奴国王の遣いが漢に朝貢して、光武帝から金印「漢委奴国王」を授かった。これ以外に、方格規矩鏡なども賜るらしい。その後の天常立は、天地を具現した方格規矩鏡を天璽に奉った。婿の国常立は、金印「漢委奴国王」を神璽と定めた。

### 『邪馬台三国志』歴史物語 中1 梗概（あらすじ）

一七〇年代後半、日隈の伊奘諾が倭奴国王朝六代女系天神天尾羽張から七代倭王に抜擢された。伊奘諾は天神宗女の向津姫を若日女に担ぎ、各地を駆け巡った。宗像家宗女の田心姫も瑞宝を肌身離さず、若日女に寄り添ってきた。

一八〇年頃、伊弉諾は東方統治建て直しを詔されると、東の副都唐古を治める太子の豊受皇太神（向津姫の婿、天照皇太神）を率い、鎮圧に動いた。その最中に、皇太神がオロチの三輪大物主と組み、謀反した。

一八五年、神戸市東部で大乱が勃発し、出雲に飛び火した。伊弉諾は闇見国（月夜見国、黄泉国）で惨敗し、向津姫・素戔嗚・宗像三皇女と共に熊襲の東部、日向に逃れた。

勝った皇太神は、瑞穂厳之国王朝（邪馬台国）を建ててや、天叢雲、大蛇、オロチ、水天神天照大神と語って天叢雲剣を天璽に奉り、仏法流布・常世づくりに入れ込んだ。豊葦原中つ国王に昇った児の天鹿見山（天羽羽）も火天神に立ち、羽羽矢を天璽に奉った。

一八〇年代後半、高千穂郷に遷座した向津姫は天照大御神と語って高天を再興した後、八咫鏡（唐草文帯三神二獣模様三角縁神獸鏡）を天璽に奉って天宮高千穂宮に坐し、現人神の日神に昇った。宗像三皇女は、日夜日神の傍ら侍ってきた。ここに倭奴国王朝は東西に分裂した。これが倭国大乱だ。

この間、倭奴国再興にはやる素戔嗚は、養子五十猛・宗像三皇女を連れて新羅に渡り、時節到来を待った。日神は自身の分身・稚日女役に稚産霊（豊葦原中つ國中興の祖・厳香来雷の娘）を指名した。

一九〇年過ぎ、宗像三皇女と共に奥出雲に潜入した素戔嗚は、布都斯魂の十握剣で八岐大蛇（八柱雷、天照大神親子）を討って瑞穂天神親子の天璽（天叢雲剣・羽羽矢）を奪い、日神に送り届けた。そこで、大國主を襲名して豊葦原中つ国再建に奮闘したが実子大己貴に邪魔された。

その後、大己貴が葦原中つ国建て直しに成功して、伯耆・安芸・播磨に勢力を広げた。五十猛（天日槍）は素戔嗚の不遇を耳にすると、日矛をかざしながら甲兵八千を率いて襲来したが、播磨穴栗邑で伊和大神も兼ねる大己貴の謀略、「火牛の計」にはまって惨敗した。



日矛も甲兵八千も奪つて八千矛と語つた大己貴は越（高志）オロチと組み、邪馬台国を攻め立てた。防戦一方の天照大神は、日神への大政奉還、倭国統一（瑞穂殿之国王朝十高天）が最善と悟つた。

二二〇年代頃、天照大神は布都御魂の十握剣を新造して倭国統一を誓つた後、高皇産靈と称して高千穂宮に赴き、妻の日神に再開した。数年後、経津主と武甕槌を葦原中つ国に派遣して大己貴に国譲りさせた。

二二〇年代前半、皇孫火瓊瓊杵に天叢雲劍・八咫鏡（日限鏡）など三種宝物、天神の御子と印す羽羽矢、日矛・日鏡など日限神宝を授けて吾田降臨を命じた。

その直後、大倭に戻つて天孫天火明（二代垂仁）に日高見国を建てさせ、関東・常陸・陸奥の制圧を命じた。同じ頃、日神も大倭に向かった。その途上で夫が急逝した。

『邪馬台三国志』歴史物語 中2 梗概（あらすじ）

日神は熊野有馬村で夫の訃報を耳にするや、急ぎ引き返して紀ノ川沿いの山道を一目散に駆け上つた。その後の彼女は、舅・夫の大葬を滞りなく済ませると、邪馬台国・高天の双方から倭の女王ヒミコに共立された。ここに、東西二朝は大倭に統一王朝をうち立て、高天勢は晴れて倭国、ヒミコ自身も倭の女王と語ることができた。

やがて纏向上之宮（巻向駅周辺）が晴れて落成すると、素戔嗚は卿に昇つて兵主の地位に就き、邪馬台国軍・倭国軍を一手に握つた。併せて、親衛隊を率いて女王の身辺警護にあたった。

太夫となつた大己貴も、都周辺や市場近辺に数多の将兵を繰り出し、治安維持に目を光らせた。大倭日高見国を建てた天火明は、尾張真清田に乗り込むや、東海中の大倭族に服従を誓わせた。

宮中での女王は、千人の侍女を侍らせる中、鬼道に日の神祭祀をおつかぶせた祭政に勤しんだ。

笠沙に日隈を再興した火瓊瓊杵は、二二〇年代中頃、西都市妻に遷都して日前と改名した。

二三〇年頃、経津主・武甕槌、海神・大山祇ら大軍を引き連れた天火明が、相模・武蔵、総、毛野、常陸など関東一円を制圧した。さらに仙台平野の陸奥国辺りまで切り取ると、ヒミコは日高見国を千葉県市原市惣社に国替えさせ、東都を開かせた。

一三八年、女王は魏に使節を送り、金印「親魏倭王」・方格規矩鏡百・五尺刀二等を賜った。

二四〇年代中頃、女王と火瓊瓊杵が争い始めた。その最中に天火明が謀反したが、敗れて常陸に遁走した。その結果、女王は火瓊瓊杵と和睦してその児海幸彦（火明饒速日）を纏向に呼び寄せ、日本家を建てさせた。その後、自ら女王を降りた天照大御神は、倭姫と共に伊勢五十鈴の川上に遷座して夫の再来を祈り続けた。

二四〇年代末に天照大御神が五十鈴宮逝くと、火明饒速日（三代垂仁）は日本朝を開き、天火明の遺児・豊鍬入姫（トヨ）を二代女王に立てた。

トヨの晋朝貢後、彼は円墳ヒミコ陵を帆立貝型前方後円墳に改造して郊祭するや、天神に立った。同じ頃、火瓊瓊杵の跡を継いだ火火出見も、日前を和国と改名して倭国統合を叫んだ。

二七〇年代後半、景行は天神から熊襲征伐を下命されると、西南藩屏將軍彦狭嶋を従えながら日向に侵攻したが、惨敗して六年間囚われた。

二八〇年代前半、西海道都督を拝命した仲哀も、熊襲征伐、副都檀日宮築造を下命された。彼は妃で四代女王の神功、武内宿禰、日本武、吉備津彦らと共に西海めざして出陣した。

### 『邪馬台三国志』歴史物語 下 梗概（あらすじ）

同じ頃、火火出見の名と遺志を継いだ磐余彦は、一八五年七月、「刃に血塗らずして勝つ」・「天下は一つ、家は一つ」を掲げて東征を決意するや、高千穂宮（宮崎市）を發つて檀日宮に襲いかかっ

11  
た。結果、仲哀軍が惨敗し、神功・武内宿禰・日本武・吉備津彦は東征軍に寝返った。

二八〇年代後半、磐余彦から新羅征伐を命じられた神功は、戦わずして三韓を降すと、檀日に凱旋して宇美に移り、次男を出産した。日本武も、吉備・出雲の切り取りに東奔西走した。

その後、東征軍は摂津六甲山南麓に進攻した。ついで河内湖經由で生駒山西麓に上陸して、大倭に向かつて進軍したが、途中で苦戦を強いられた。そのため、南紀那智に迂回した。

同じ頃、武内宿禰軍は和歌浦・難波を従えた後、山城・近江に攻め入り、琵琶湖畔にあった北陸道・東山道の道都も押さえた。

出産後、東征軍に戻った神功は、六甲山南麓・那智・熊野であがなう賊徒鎮撫に奔走してきた。

三世紀末、那智・熊野を制圧した磐余彦軍は、女神大山祇・海神本家筋、海神三神・住吉三神ら諸軍を率いて熊野を北上して、大倭磯城に殺到した。敵の総大将長スネ彦は徹底抗戦したが、惨敗した。ここに至って、火明饒速日は長スネ彦を殺害して羽羽矢・瑞宝を差し出し、帰順を願い出た。生駒山に立てこもった長スネ彦の弟アビ彦は、陸奥に遁走しても日本將軍と言い張った。

この間、倭女王は、豊鍬入姫↓倭迹迹日百襲姫↓神功皇后↓倭姫と続いた。

二九〇年代末、東国平定に赴いた日本武は、戦わずして日高見勢を説き伏せ、都に連れ帰った。三〇〇年頃、和国王の磐余彦（神武）は敵方大倭国と組んで橿原に都する大和朝廷（大↓大倭、和↓和国）を共立した。言い換えると、彼は火火出見に成り代わって、倭（奴）国王朝を晴れて再興したわけだ。

続いて彼は、火明饒速日の児可美真手に物部姓・瑞宝・十握剣を授け、かつて海幸彦が火火出見に命乞いまでして誓った宮殿警護および大和朝廷の守護を厳命した。

三〇四年二月、神武は鳥見山中に日向式柄鏡型の巨大前方後円墳（桜井茶臼山古墳）で郊祭して天照大御神・高皇産霊を天に配し、皇祖天神並びに皇祖皇宗に奉った。